

藤原宮第27—14次の調査

(昭和55年1月)

この調査は出屋敷・膳夫間の道路拡幅工事に伴う事前調査として実施した。調査地は天香久山の北方400～500mの水田で、藤原京左京四条四坊と五条四坊の一部にあたる。調査地を藤原京四条々間小路と四条大路の推定位置2ヶ所に、幅約3mのトレンチで設け、条坊遺構の検出に主眼をおいた。調査の結果、所期の目的どおり北部トレンチにおいて四条々間小路を、南部トレンチにおいて四条大路を検出した。

北部トレンチの土層は、上から耕土、床土、灰褐色粘質土、茶褐色粗砂となり、茶褐色粗砂層上面(表土下0.4m)において、四条々間小路両側溝を検出した。側溝はともに幅0.8m、深さ0.16mの素掘り溝で、暗灰茶褐色粘質土が充満する。小路の路面幅は確認面で6.3m、側溝心々で7.12mである。

南部トレンチは3筆の水田にまたがり全長27mである。四条大路北側溝は遺存状態が悪く、幅0.6m、深さ0.14mの溝底近くを検出したにとどまる。これに対して南側溝の残りは良く、幅1.5m、深さ0.4mの素掘り溝を検出した。溝内には暗灰茶褐色粗砂が堆積し、藤原宮期の土器片が含まれる。側溝壁の立ち上がりは、ともに路面側が急傾斜であるのに対し、坪側は緩傾斜で立ち上がる。四条大路の路面幅は確認面で14.9m、側溝心々で15.8mである。

今回検出した四条大路と四条々間小路の路心間の距離は136.2mである。この数値は、従来の条坊の調査で得られた1町の長さに近似する。四条々間小路はこれまで5ヶ所で確認されている。第20次調査で検出した四条々間小路・朱雀大路計画線の交点と、今回検出した四条々間小路心を結ぶ方位は、方眼方位に対して東で北へ35'強の振れを示す。この振れは宮中軸線の振れ26'30"に較べてやや大きい。今回初めて検出した四条大路は、宮の東面中門にとりつく道路であるが、路面幅員が15m(5丈)の大路であることが明らかになった。

(調査位置は20Pの位置図に示す)。